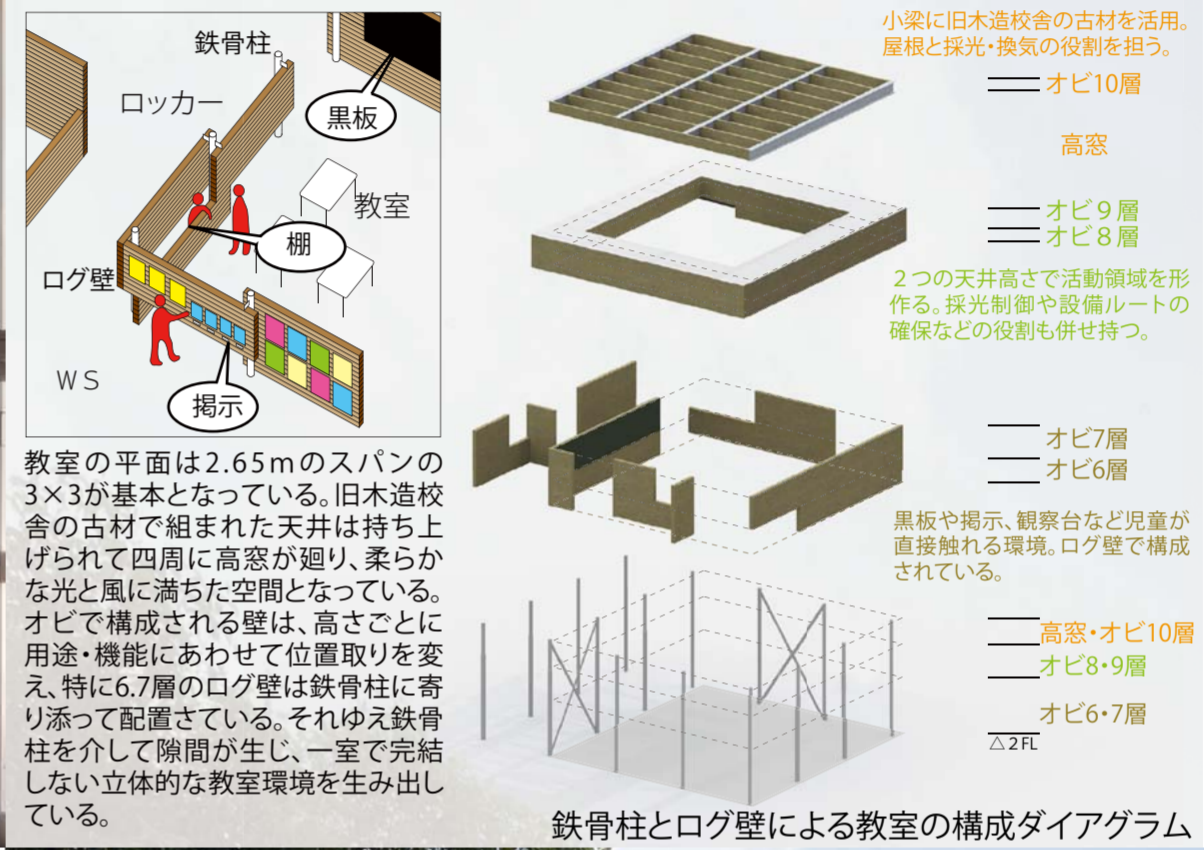




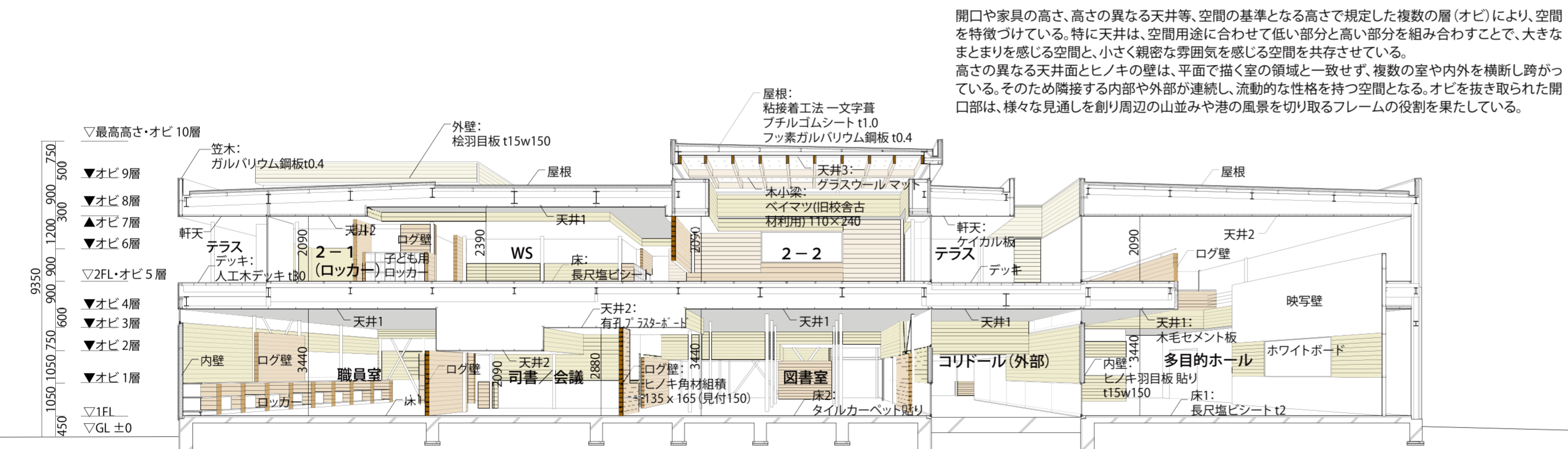
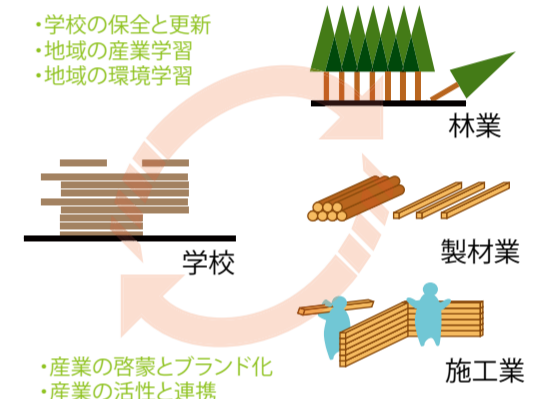
教室からワークスペース (WS) を見る。WSと教室はログ壁で囲われたロッカースペースを介して連続する。引戸で空間を視覚的に分節することができる。ヒノキのログ(見付150)の間仕切壁や羽目板は、どこでもピンナップボードとなる。



校庭より石段上の東面の北面をみる。2.65mを基準グリッドとする白い鉄骨柱と150mm幅のヒノキの羽目板が観視を形成する。東側1回には15スパン・役40mの回廊が伸び、保存された石段と共にかつての旧校舎の印象を継承している。



設計時から地域の森林組合の方々や地域の木の活用について、安全性・経済性・将来にわたるメンテナンス性など様々な議論を積み重ね、地域のヒノキを壁や外壁の羽目板として使用するに至った。ヒノキの壁は地域性を考慮し、すべて現場で積み上げられている。地域が建設から関わり、今後も常に地域の手で利用・保全が繰り返されて山に関わる産業が地域のシンボルと共に活性化する地産型の持続可能な建築を目指している。



図書室。奥の低天井は昇降口、手前のカウンターは司書スペース。教室に向かう階段や多目的室等、ヒノキの壁で連続し、空間の結び目となっている。

多目的ホール。外部の回廊を渡り、奥が図書室。天井に吸音性の高い材を用い機能性を高めている。天井とヒノキの壁が図書室へと連続している。

石段上の回廊を見る。コーナーの開口は図書室。前庭を介して手前が職員室。羽目板幅(内部ではログ材高さ)150mmが建物の基本モジュールとなっている。

尾鷲市立尾鷲小学校

この建築は鉄とヒノキでできている。100年以上の歴史をもつ木造校舎の建替えて、象徴的な石段に面する回廊空間が校舎全体をつなぎ、旧校舎の記憶を継承している。主体構造は2.65mのグリッドに100φ程度の柱が配置され、必要に応じて耐震ブレースを設けることで極めてシンプルで軽快な鉄骨造としている。それに伴い内外の壁は非構造となり、仕上げは地域の資源である尾鷲ヒノキを活用している。山から切り出した木をロスなく利用する方法は、芯持ち材を用いることが挙げられるが、構造材は建物の規模で材質や使用量に限界がある。一方、仕上材では節や虫食いのないものが好まれ、かなりのロスが発生する。ハードルとなる構造を切り離し、節や虫食いのある木※1をそのまま活かす木材の新たな利用法として、ヒノキの角材をログ加工して積み、間仕切りとして使用した。ログ壁は下地も仕上げもなく、ヒノキを積んだままの地肌がフィニッシュとなっている。素材の温かな質感と掲示使用にも耐え得る強さを併せ持つログ壁は、子どもたちの空間の使い方に合わせて一定の高さごとに鉄柱へ寄り添う位置を変えている。ヒノキの壁に生じた隙間からは光や風がこもれ、隣り合う空間の気配を緩やかに紡いでいる。休日は地域の方が気軽に立ち寄れる交流・憩いの場としても提供がなされ、地域の木が使われた図書室などが中心となり学校全体が地域の活動の拠点の役割を担うように考えられている。

※1三重県が「あかね材」として推奨するスキノアカネトラカミキリに侵食された材。木材として通常の性能に関して遜色ないことが実証され、ブランド化を進めている。

敷地北側にある保存された正門より見る。